

日田市出身で、独創的な作品が日本の画壇で高く評価された宇治山哲平。その生誕110年を記念して、生涯にわたる代表作を展示する『宇治山哲平にみる「やまとごろ」』が開催されます。本展のタイトルとなった晩年の「やまとごろ」シリーズに注目し、展覧会の見どころや作品の魅力について、宇治山研究の第一人者である、佐伯市役所地域振興部 文化芸術交流課 参事(元大分県立美術館副館長)の加藤康彦さんに話を伺いました。



佐伯市役所地域振興部 文化芸術交流課 参事(元大分県立美術館副館長) 加藤康彦

日本の美を追求した

宇治山芸術の真髓

生誕110年
宇治山哲平にみる
「やまとごろ」

— 加藤さんと宇治山作品の出会いについて教えてください。

学芸員(大分県立芸術会館)になって最初の仕事で、数カ月前に亡くなった宇治山哲平のアトリエで作品の整理をするこゝろで、作品を間近に見て、「これ、ほんとに油絵?」というのが率直な感想でした(笑)。海外のアーティストや美術評論家の中には、彼の作品は絵画というよりクラフト(工芸品)だという人がいますが、私もそんなふうには感じませんでした。その謎は宇治山哲平を知るにつれて解けてくるのですが、彼はもともと漆職人で正規の美術教育は受けていません。画壇にも、漆工芸をやりつつ木版画家としてデビューしています。そんな彼の工芸家

あるいはデザイナーとしての感覚が、晩年の抽象画を生んだのだと思います。

— 作品の特徴はどんなところですか。

一言でいうと強い作品です。彼の絵は、鉱物の細かい粒子を絵の具に混ぜ、左官職人のようにペインティングナイフを鏝のようにして塗りつけていくんですね。だから、色と形にマチエール(絵肌)も加わり、表現としてとても強い。学芸員時代、他の作家と並べて展示すると宇治山の作品が目立ちすぎて苦勞しました。それほど異質の強さがあります。加えて仕事の丁寧さ、職人としての技術が作品を特徴づけていると思います。

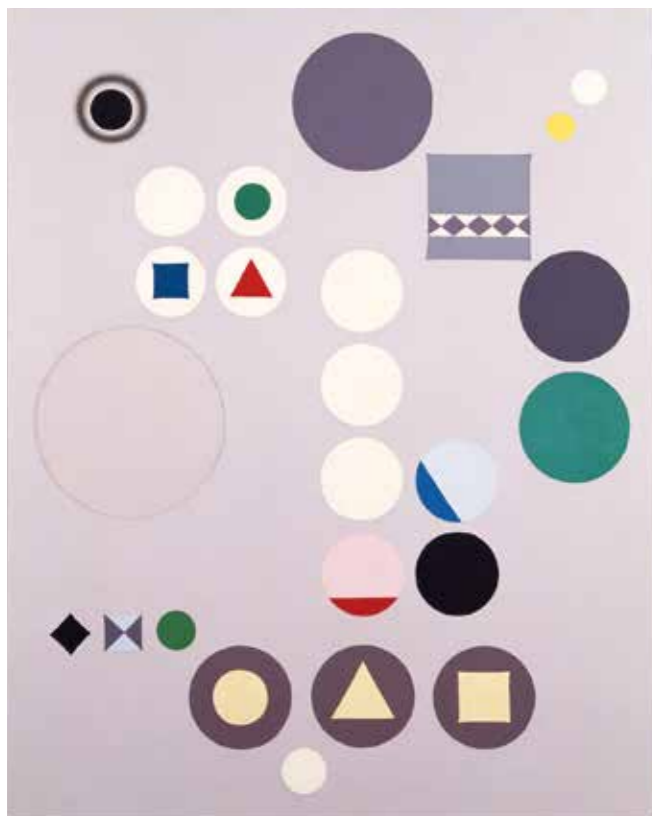
— 本展の見どころを教えてください。

画業の展開でいうと、木版画家としてスタートし、油絵に移って戦前は風景画、戦後はキュビズム的な静物画を描きます。ユニークなのは、その後、奈良に移り住み、目で見たものを写すのではなく自然から直に感じたものを色と形に写し替えるよう、と変わっていく。自然の中で感じるもののけのようなものを絵にして、日本古来の美を表現したいと考えるのです。ここから抽象の世界に行くんですね。皆さんがご存じの抽象画家としての宇治山哲平は奈良から帰った50歳頃から亡くなるまでの25年間ですが、今回はその土台となる画業も一度に見ていただけるので、

「こういう絵からああいう抽象画に変わっていったんだ」というふうに楽しめると思います。そんな中で最終的に宇治山が求めた日本の美のようなものも感じていただければ、それが「やまとごろ」という本展のタイトルになつていくんですね。

— やまとごろとはどんなものですか。

宇治山の抽象画は60歳頃までの約10年間で色も形も整然と美しいものになり、そこから亡くなるまでの約15年間で「王朝」「華厳」「やまとごろ」の3つのシリーズを描き上げます。やまとごろは彼が取り組んだ最後のシリーズ名でもあり、和の色をうまく使った伝統的な色味が特徴



《やまとごろ》1986年 大分県立美術館蔵

です。「やまと日本の美をとらえられるようになった」と本人が語っているように、このシリーズこそ日本人の心だという気持ちがあったのだと思います。

— おすすめの1点を教えてください。

個人的に好きな作品を1点だけ挙げるなら『石の華』ですね。油絵に転向する時に後押ししてくれた福島繁太郎という美術評論家がいのですが、宇治山が師と仰いでいた福島から抽象画に向かうことを否定され、悩んでいた時に、彼が亡くなつてしまう。そして「福島繁太郎先生の御霊に捧ぐ」という副題を付けて描いたのがこの作品です。黒い背景の中に黒い石があり、石から白い花が咲いている、まさ



《絵画 No.194 響》1969年 東京国立近代美術館蔵



《石と卓》1952年 大分県立美術館に寄託



《石の華》1961年 日田市蔵

にもものけの世界のような絵で、宇治山はこれを境に一気に抽象の世界へと向かう。一人の作家を生み出していく人生のドラマのようなものを感じて、個人的にとても興味をひかれます。

— 実際に見るのが楽しみです。最後に来場者のメッセージをお願いします。

まずあまり先入観を持たずに見ていただければと思います。宇治山の作品は表面の処理がまさに職人肌の仕事で、絶対に本物を見ないとそのよさはわかりません。そして宇治山哲平といえば、「あ、△□ね」というふうに見られがちですが(笑)、今回はぜひ腰を据えてご覧いただきたいと思います。

DATA

大分県立美術館開館5周年記念事業
生誕110年
宇治山哲平にみる「やまとごろ」
10/30(金)~11/29(日) ▶大分県立美術館 3階 展示室B

10:00~19:00、金・土曜~20:00 ※入場は閉館の30分前まで 一般800(600)円、大学・高校生500(300)円 ※()内は前売りおよび有料入場20名以上の団体料金。
※大分県芸術文化友の会 びびKOTOBUKI無料(同伴者1名半額)、TAKASAGO無料、UME団体料金。障がい者手帳等をご提示の方とその付添者(1名)は無料。学生の方は入場の際、学生証をご提示ください 大分県立美術館 Tel:097-533-4500

関連EVENT



▲鈴木広志 photo by Kumiko Tajima ©Gion's trunk

生誕110年 宇治山哲平にみる「やまとごろ」
美術、音楽(舞台芸術)の融合~世界に1つだけのダンス~

当館学芸員によるギャラリートークと、iichikoグランシアタ1Fホワイエにある宇治山哲平「弾む」レプリカ前でのパフォーマンス観劇がセットになった、両館の魅力をたっぷり楽しめる特別イベントを開催いたします!

10/31(土) ▶大分県立美術館3階展示室B、iichikoグランシアタ1階ホワイエ

時 ①11:00~12:30、②14:30~16:00、③18:00~19:30 各回30名

無料(要展覧会観覧券)

ギャラリートーク: 大分県立美術館学芸員
作曲・演奏: 鈴木広志 ほか
創作・出演: 86B210



▲86B210



©Taro Kotera